

長崎方言話者による 自動詞化テアル構文の非標準的使用の予備的分析

—非結果相の「売ってある」—

桑戸 孝子*¹・上野 誠司*²

A preliminary analysis of Nagasaki Japanese speakers' non-standard use
of the intransitivising *-te aru* construction
—Non-resultative *utte aru*—

KUWATO Takako and UENO Seiji

Keywords: テアル構文, 長崎方言, 気づかない方言, 存在表現

1. はじめに

長崎方言話者は、次のような表現を使用することがある。

- (1) スーパーにイチゴが売ってあるよ。
(2) スーパーにイチゴの売ってあるよ。

両者とも、概略(3)に相当する意味を表している。

- (3) スーパーにイチゴが売り物として存在している。

(1)と(2)の違いは、主格の格助詞の違いである。(1)では「ガ」格が、(2)では「ノ」格が使用されている。現代日本語の共通語においては一般に主格には「ガ」が、一方、長崎方言においては「ノ」が用いられる。このことから、(1)は共通語として、(2)は長崎方言として使用されると考えられる。

次の例も見てみよう。

- (4) 道路の反対側の通りには、あっちこっちに温泉たまごが売ってあるよ。

これは、長崎県雲仙市の海岸沿いの観光案内板に書かれていた表現である。この案内板は、平成20年に当時小学校5年生であった児童二人によって作成されたものである。観光案内版のほかの箇所には長崎方言と思われるところはなく、(4)についても共通語として書かれたものであることが窺える。

以上のことは、長崎方言話者が「[場所]=[対象]が売ってある」という表現（以下「売ってある」表現という）を共通語および長崎方言を使用するときに用いるということを示している。

しかし、これらの表現は共通語では文法的に適格ではない。共通語ではテアル文は、意志的行為の結果としてもたらされる状態、すなわち結果相を表す表現であるとされている（寺村 1984, 森田 1994）。この共通語のテアル文の意味を動詞「売る」に当てはめれば、「売って

*¹工学部 共通教育センター 講師

*²工学部 共通教育センター 准教授

2011年 3月 31日受付

ある」は、売り手から買い手に対象の所有権が移動したあとの状態を表すことになるので、共通語では、上記(1)(2)(4)は、(3)に示したような「対象がある場所に売り物として存在している」という意味を表す形としては容認されない。

(1)を共通語の適格な形式で言い換えると、次の(5)(6)のようになる。共通語では(7)の形も可能だが、(3)の意味とは大きく異なる。(7)は「イチゴがすでに幾つか売れた」ということを含意するが、(3)にそのような含意はない。

- (5) スーパーにイチゴが売られている。
- (6) スーパーでイチゴを売っている。
- (7) スーパーでイチゴが売れている。

長崎方言話者は上記のような表現も容認し使用すると見られるが、一方で「売ってある」表現についてもかなりの頻度で使用している。しかも、これは長崎方言話者に限ったことではないと思われる。詳細は後述するが、国会会議録検索システムを用いて調査したところ、この「売ってある」表現が九州・近畿地方を中心に広く散見されるのである(第3節参照)。このことは、「売ってある」表現が単なる誤用として片付けられない現象であることを示唆している。

本稿は「売ってある」表現の存在を指摘し、その特性を明らかにすることを目的とする。前述したように、「売ってある」表現は、長崎方言話者にのみ見られる現象ではないと考えられるが、今回は調査の第一段階として、長崎方言話者が用いる「売ってある」表現に限定することとする。

本稿の構成は次の通りである。まず、第2節では、共通語のテアル構文と比較しながら、「売ってある」表現の特性について論じる。また、第3節では、国会会議録検索システムを用いた「売ってある」表現の使用実態調査を実施し、その結果について考察する。さらに第4節では、社会言語学的位置づけとして、「売ってある」表現が気づかない方言であるかを検証する。最後に、第5節では、全体のまとめと今後の課題について述べる。

2. 統語的・意味的分析

2.1 共通語のテアル構文との比較

本節は益岡(1987)、影山(1996, 2000)の共通語のテアル構文の分析に基づき、共通語のテアル構文と長崎方言話者の「売ってある」表現とを比較、分析する。

2.1.1 共通語のテアル構文の分類

益岡(1987)は共通語のテアル構文を、まず統語的観点からA型とB型に分類している。

A型は、「対象」という意味役割を担う名詞句がガ格で標示され、これに「Vテアル」(ただしVは動詞を表す)という形が後続する。Vには他動詞または非能格自動詞が現れる。

これに対しB型は、「動作主ガ対象ヲVテアル」という形をとり、A型の場合とは異なり、「対象」という意味役割を担う名詞句が、ヲ格で標示され、「動作主」役割を担う名詞句がガ格で標示される。次の(8a)がA型、(8b)がB型の例である。

- (8) a. リビングテーブルには花が飾ってある。
- b. 私は一日中、身を空けてある。

B型は本稿の分析には直接関係しないので、詳しい説明は割愛し、A型に絞って議論を進める。

A型の全体的な意味的特徴は、「意志的行為の結果生じる、対象の存在その他の状態が、視覚でとらえられる形で存続していること」(益岡 1987: 224)であり、さらに、A₁型とA₂型に下位分類される。A₁型は「行為の結果もたらされる、対象の或る場所での存在を描写するタイプの表現」である。このとき「Vてある」のVは「置く」、「並べる」、「飾る」などの「配置動詞」と呼べる他動詞が主である。(8a)がこの例である。

他方、A₂型は、「或る行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態が、視覚可能な形で存続していることを描写するタイプの表現」である。例えば次例がこれに当たる。

- (9) a. 新聞紙の切り抜きが折ってあった。
- b. 入口に近い片隅が一畳あまりの広さだけあけて

ある。

本稿で扱う長崎方言話者の用いる「売ってある」表現に関係するのは、上記の A₁ 型である。以下では共通語の特に A₁ 型の特性を詳しく見ながら、テアル構文 A₁ 型と「売ってある」表現とを比較していこう。

2.1.2 共通語のテアル構文 A₁ 型と「売ってある」表現の比較

益岡(1987)は、共通語の A 型の特徴として次の点を指摘しており、これらの特徴は、A 型の下位類である A₁ 型にも当てはまる。

第一に、共通語のテアル構文 A 型では、「対象」の意味役割を担う名詞句がガ格の位置を占める。例えば、(10a)のヲ格で標示された目的語「板」は、「積み上げる」という動作の「対象」という意味役割を担うが、テアル構文(10b)では、ガ格で標示される。

- (10) a. 従業員が板を積み上げた。
b. 板が積み上げてあった。

(11b)のように、「売ってある」表現にもこの特徴は当てはまる。

- (11) a. スーパーで、店員がイチゴを売っている。
b. スーパーにイチゴが売ってある。

第二に、共通語のテアル構文 A 型では、「動作主」項は抑制され、一般に表面には現れない。例えば、(10a)の動作主項「従業員」は、テアル構文(12a)では、受動文とは異なり、「によって」を用いても共起させることができない。

- (12) a. 板が(*従業員によって)積み上げてあった。
b. (*先生によって)廊下には線が引いてあった。

ただし、このような動作主項は、表面には現れないが、背景化されているだけで、統語構造に存在すると考えられる(影山 1996, 2000)。その証拠として、「わざと」といった主語の意図性を表す副詞や、「～するために」

といった動作主を含意する目的節をつけることが可能であるという事実が挙げられる(影山 1996, 2000)。次の例を参照されたい。

- (13) a. 廊下には、わざと線が引いてある。
b. 窓には、わざと簾が掛けてある。

- (14) a. 園児が歩きやすいように、廊下には線が引いてある。
b. 通行人に覗き込ませないために、窓に簾が掛けてある。

「売ってある」表現でも、動作主項は、(15a)が示すように、表面には現れないが、(15b,c)のように目的節や「わざと」が共起可能であることから、統語構造上に存在すると考えられる。

- (15) a. スーパーに(*店員によって)イチゴが売ってある。
b. 貧乏な人でも買えるように、この店には安い傷物のイチゴが売ってある。
c. この店には傷物のイチゴがわざと売ってある。

また、「売ってある」表現は、一種の「存在表現」であるという点でも、A₁ 型テアル構文と共通する。その証拠として、次のような2つの共通する事実が挙げられる。

第一に、「売ってある」表現(16b)は、A₁ 型テアル(16a)と同様に、存在動詞アルとの等位接続が可能である。

- (16) a. 部屋には生け花が飾ってあり、神棚にもお供え餅があった。
b. デパートには、家電製品も家具も服も売ってあり、地下には食品もあった。

第二に、「売ってある」表現(18)は、A₁ 型テアル(17)と同様に、典型的な存在表現から成る問いの文に対する適切な答えの文になり得る。

- (17) (問) その部屋にはどんなものがありましたか。
(答) 風景画が飾ってあり、ピアノが置いてあり、

陶器が並べてありました。

(18) (問) その店にはどんなものがありましたか。

(答) 風景画と陶器が売ってありました。

以上のことから、長崎方言話者の「売ってある」表現は、共通語のテアル A₁ 型と極めて多くの共通点を持つ。

ただし、次のような共通語テアル A₁ 型との顕著な違いも存在する。

第一に、「売ってある」表現は、共通語のテアル A₁ 型とは異なり、「売る」という「配置動詞」ではない動詞が関与している。

第二に、長崎方言話者の「売ってある」表現は、行為の結果状態を意味しないという点で、共通語のテアル構文とは異なる。「売ってある」表現は、「対象の所有権が、すでに売り手から買い手に移動した(すなわち、対象が売れた)」ことを含意せず、単に「対象が売り物として(店頭などの場所に)存在している状態である」ことを含意するにすぎない。

2.2 まとめ

本節では「売ってある」表現の以下の特性が明らかになった。

共通語のテアル構文 A₁ 型との共通点は、(1)「対象」の意味役割を担う名詞句がガ格の位置を占め、(2)「動作主」項は抑制され、一般に表面には現れないが、統語構造に存在すると考えられ、(3) 一種の存在表現としての特徴を持っている、という点である。

他方、共通語のテアル構文 A₁ 型との違いは、(4)「売る」という配置動詞以外の動詞が関与し、(5)「対象が売り物として存在する」という非結果相の意味を表す、という点である。

「売ってある」表現の特性は、このほかにも考えられるが、次稿に譲ることとする。また、「売ってある」表現と極めて類似した表現として、近年その使用の増加が報告されている「[対象]が売っている」という表現があるが(又平 2001, 田川 2002, NHK 放送文化研究所)、これとの比較考察についても次稿に譲る。

3. 使用実態調査

3.1 調査方法

本研究では国立国会図書館による国会会議録検索システム (<http://kokkai.ndl.go.jp/>) を用いて、「[対象]が売ってある」表現の使用実態を調査した。国会会議録は、1947 年の第 1 回国会より現在に至るまでの国会本会議、各種委員会の議事を文字化したものである。本検索システムを利用した理由は、次の通りである。まず、国会という高い公共性を持った場面での発話であることから、そこでの発言者は、「共通語である」と発言者自身が信じている表現を使おうとする傾向が強く、「方言である」と発言者自身が信じている表現を使うことは避けようとする傾向が強いと考えられる。次に、発言者は主に国会議員や省庁職員といった人物であることから、話者の出身地の特定が比較的容易であると思われる。さらに、その出身地についても、一定地域に偏ることなく全国を網羅していると予測される。また、約 64 年間にわたる発話が集積されたデータであるため、通時的分析も可能であると考えられる。

本調査は 2011 年 2 月に実施した。検索対象としたのは、国会会議録検索システムの 1947 年 5 月の第 1 回国会より 2010 年 12 月の第 176 回国会までの期間で、全ての本会議、委員会である。まず、「売ってあ」という文字列を含む全データを抽出し、その中から「売ってあります」「売ってあった」「売ってあって」など「売ってある」の全ての屈折形を抜き出し分析を行った。

3.2 調査結果と考察

調査の結果を以下に示す。まず、「売ってある」という形は 52 例存在しており、このうち、結果相の「売ってある」は 29 例、非結果相の「売ってある」は 23 例であることが確認された。64 年間の発話データにおいて 23 例というのは決して多いとは言えないが、規範文法に則っていない非結果相の「売ってある」が「売ってある」という形全体の 44% を占めているという事実は注目に値する。このことは、非結果相の「売ってある」表現が単なる誤用とは考え難い現象であることを示している。

次に、非結果相の 23 例を格体制の違いにより分類した。その結果、「[対象]が売ってある」が 8 例、「[場所]に[対

象]ガ売ってある」が4例、「[場所]ニ売ってある」「[場所]デ売ってある」がそれぞれ2例、「[場所]ニ・[場所]デ・[対象]ガ」のいずれも伴わない「売ってある」が7例確認された(表1参照)。これにより、非結果相の「売ってある」が[対象]ガ格句、[場所]ニ格句および[場所]デ格句と共起することが確認できた。

表1. 「売ってある」表現の格体制ごとの出現数.

	出現数
Y ガ売ってある	8
X ニ Y ガ売ってある	4
X ニ売ってある	2
X デ売ってある	2
売ってある	7

また、これら23例の話者の出身地を見ると、九州のみならず中国・近畿・関東・中部・北海道と全国に渡っていることが明らかとなった。表2を見ると、最も多いのは九州地方(7名)および近畿地方(7名)で、合わせて全体の64%を占めている。ほかの地方での使用も確認できるものの、このことは、非結果相の「売ってある」表現が九州および近畿地方で多く使用されていることを示唆している。

では、ここで国会会議録における非結果相の「売ってある」表現出現数の変遷を見てみよう。国会会議録に初めて非結果相の「売ってある」表現が現れるのは、1967年(昭和47年)6月20日の次の発言である。

(19) [55・参・予算委員会・17号1967年(昭和47年)6月20日]

参議院の会館の下の売店がありますがね、あそこにこれと同じ入っているのが売ってありますね。

(鈴木強 国会議員)

上記(19)を見ると、「[場所]ニ[対象]ガ売ってある」という構文が認められる。「買い手にモノを売った」とあの結果の状態ではなく、「物が売店に売り物として存在している」という意味で使われていることも確

認できる。「売ってある」という形としては、この初出の1967年以前にも21例が認められたが、それらは全て下記(20)に代表されるような結果相の「売ってある」であった。(20)は「[対象]ハ[買い手]ニ売ってある」という構文であり、「売る」という行為が既に完了していることがわかる。

(20) [38・衆・予算委員会第一分科会・5号1961年(昭和36年)3月2日]

今申しましたように、この援助物資は一ぺんもう国民に売ってあるという形をとっておりますので、この支払いの仕方については、どうするならば一番合理的かということをお願いいたします。して、どうするかというのをたぐいま検討をしておる、こういうことでございます。

(田畑金光)

表2. 地方分類別「売ってある」表現発言者数と出現数

	発言者数 ^(注1)	出現数 ^(注2)
北海道	2	2
東北	0	0
関東	2	2
中部	1	1
近畿	7	8
中国	1	1
四国	0	0
九州・沖縄	7	8
不明	1	1

図1は、国会会議録における非結果相の「売ってある」表現の発言数の変遷を年代別にまとめたものである。初出の1967年から1990年代までは変化は見られ

(注1) 発言者数とは、発言した人の異なり数のことである。同一人物が複数回発言した場合は1と数える。

(注2) 出現数とは、調査対象表現を使用した回数の延べ数のことである。1回の国会発言において2度使用した場合は2と数える。

ず、2000年代に入り著しく増加していることがわかる。このことから、非結果相の「売ってある」表現は、1960年代から使い始められ、近年多く見られるようになった現象であろうと考えられる。

この結果は、NHK放送文化研究所（参考文献21参照）が実施した「[対象]ガ/ヲ売っている」という表現についての調査結果と類似した傾向を示している。その調査は、2005年にウェブ上で行われたもので2053人から回答を得ている。「新鮮な野菜（が/を）売っているスーパーを探している」という言い方について「を」と「が」のどちらが正しく、またどちらを使用するかを調査したものである。その結果、全体として「『を』が正しいと思うし自分も『を』と言う」という人が圧倒的に多かったものの、若い年代になるほど「『が』が正しい」、「『を』が正しいと思うが自分は『が』と言う」という回答が多くなっていることが明らかとなっている。

すなわち、これまでの調査に限って言えば、「売ってある」表現も「[対象]ガ売っている」という表現も若い年代ほど容認度が高いという共通点があると言え、これは大変興味深い。

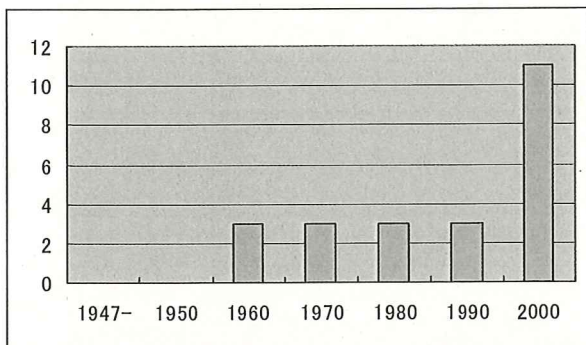


図1. 非結果相「売ってある」表現の出現数の変遷

以上、国会会議録検索システムを用いた調査から、「売ってある」表現は長崎方言話者のみならず、九州・近畿地方を中心に全国に広く散見され、その使用は近年増加傾向にあるということが明らかとなった。「売ってある」表現の存在が国会会議録においても確認できたことは非常に意義深い。

4. 社会言語学的位置づけ：気づかない方言としての「売ってある」の提唱

一般に「気づかない方言」と呼ばれる概念は、田中(2006)が指摘するように、従来、個々の研究者により微妙に異なる特徴付けがなされており、例えば半沢(2003)によれば、「地域性を持っているにもかかわらず共通語形であると認識され、消滅せずに現在の若年層にも根強く使われているもの」とであるとされる概念である。代表的なものとしては、肥筑方言の「(出来事が)あっている」(高間 2007, 香月 2008)、西日本で使用される「なおす」などがある。

これまでの研究史において、「気づかない方言」という術語は井上(1983)に始まったものとされ、さらに遡って、柴田(1965)に「気づかれない方言」という呼称の見られることが報告されている(橋本 2005)。現在最も広く用いられている術語は、「気づかない方言」であるが(橋本 2005)、研究者によって、「気づかれない方言」「疑似標準語」「地域共通語」「変容方言」「地域言語的用法の共通語視」などと称されることもある(田中 2006:396)。また、その特徴付けも研究者によって異なる。田中(2006)によれば、先行研究における主な特徴付けの要素は、「㉔共通語だとの意識」「㉕語形」「㉖地方的共通語としての安定」の3点で、研究者によってそのいずれかまたはその組み合わせにより特徴付けられている。その上で、田中(2006:396)は「共通語視に関する研究は、前述の3要素の㉔意識を踏まえたうえで、㉖の地方的共通語としての安定において、明確な共通語使用場面での使用が確認できることを必須とすべきである」と指摘している。

本節冒頭に述べた半沢(2003)による「気づかない方言」の特徴付けも、田中(2006)が指摘する2要素を含んでおり、両者は意味的に何ら矛盾するところはない。すなわち、両者はこれら2要素を「気づかない方言」の必要条件であると主張しているのである。先行研究の特徴付けに用いられた3要素の一つである「㉕語形」は、「気づかない方言」を定義する上での必要条件ではないと考えられるが、共通語形との同一性は、共通語視を誘因する要素の一つとなると考えられる。

そこで本研究では、「気づかない方言」と呼べるため

の必要条件を「㊤共通語だとの意識があると確認できること」かつ「㊤地方的共通語としての安定性が確認できること」とし、「㊤語形が共通語と同じであること」は共通語視の可能性の存在の傍証と考える。

ここで、本稿で取り上げた「売ってある」表現について「気づかない方言」であるかを検証する。まず、「㊤共通語だとの意識」について考察する。第3節で論じた国会会議録検索システムを用いた調査の結果がその証拠となろう。国会は公共性の高い場であるため、発言者に共通語を話そうという意識が強く働くと考えられる。そのため、国会会議録はこれまでも「気づかない方言」を研究するための資料として用いられてきた（香月2008:207）。今回の調査では23例の「売ってある」表現が確認できたが、これは話者が方言であるとは気がつかずに使用しているという可能性を強く示唆している。

また、本研究で独自に行った長崎方言話者に対する質問紙調査の結果からもそのことが窺える。本質問紙調査は、「売ってある」表現がどの程度「自然な日本語」だと感じられるかを尋ねたもので、2011年2月から3月にかけて長崎方言話者46名を対象に実施した。46名の内訳は、10代-20代が31名、30代-40代が8名、50代-60代が7名であった。「売ってある」表現および「売る」の類義語を用いた表現を15例提示し、自然な日本語だと感じるならば○、やや不自然ならば△、不自然な日本語だと感じるならば×をつけて評価してもらった。全15の例文のうち、「売ってある」表現は7例あり、さらにそのうち、ガ格名詞句に現れる名詞が無生物であるものは4例ある。図2は、これら4例の例文を長崎方言話者がどの程度「自然な日本語」と感じたかを評価した値の平均値を示したものである。○を2点、△を1点、×を0点として加重平均をとった。図2を見るとわかるように、長崎方言話者が「売ってある」表現を「自然な日本語」と感じる程度は非常に高い数値となっている。これは、長崎方言話者の多くが「売ってある」表現を共通語として文法的に適格であると考えていることを示唆している（本調査の詳細な分析は別稿に譲る）。

次に、「㊤地方的共通語としての安定」について考えてみたい。まず、上述した国会での「売ってある」表現の使用がその証拠と成り得る。田中（2006）は、地方共通語としての安定を検証するためには、フォーマル文

体・改まった場面・配付印刷物や出版物での書き言葉のいずれかでの使用が確認できることを必須とすべきであると述べているが、国会での発話は、まさしくこの改まった場面と言えるのである。また、第1節で述べたように共通語を用いて作成したと思われる観光案内版の「売ってある」表現の存在も極めて有力な証拠となると思われる。さらに、第2節で言及した「イチゴが売っている」という表現について書かれた論文（又平2001）の中に登場する下記用例も「売ってある」表現が気づかない方言であると主張する根拠の一つとなろう。

(21) 19日が発売日のはずの夏コミのカタログが売ってあった。

（又平2001:100）

これは、「イチゴが売っている」という誤用を避け、規範的文法に則った形を用いるとどうなるかとして紹介された3つの用例の中の一つである。(21)を見れば明らかのように、「既に売った」という結果相の「売ってある」ではなく、「カタログが売り物として存在していた」という意味であり、これはまさしく「売ってある」表現である。国会での発話に加え、配付印刷物や出版物での書き言葉においても、「売ってある」表現を確認できたこととなる。

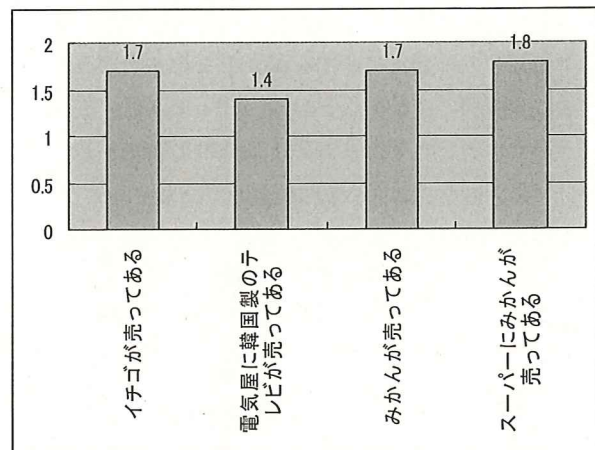


図2. 長崎方言話者が感じる日本語としての自然さ

最後に、「㊤語形」の点からも検証してみる。第2節で述べたように、「てある」「売ってある」「[対象]が売ってある」という長崎方言話者の「売ってある」表現

の構成要素は、それぞれ個別の形としては、共通語においても存在する。共通語との唯一の異なる点は、共通語においては「[場所]=」という二格名詞句によって売り物である対象が存在する場所を表せないことであるが、このような否定証拠は、長崎方言域内では得難く、長崎方言以外の話者によって直接、「共通語ではそうは言わない」と否定されない限り、長崎方言話者は気づかない可能性が高いと考えられる。このように、構成要素の語形が全て共通語に存在し、それらを組み合わせた或る形だけが方言形である場合、方言話者はその組み合わせた形を共通語であると誤認しやすい。

以上のことから、「売ってある」表現は、「④共通語だとの意識」「⑤地方的共通語としての安定」という必要条件を満たしており、かつ、「⑥語形」という点からも、共通語意識がある可能性が示唆される。よって、本稿では、「売ってある」表現は「気づかない方言」である、という仮説を提案する。

しかしながら、本研究での調査は、「売ってある」表現が「気づかない方言」であると断定するに足る十分な証拠を提示したかという点も疑問が残る。長崎方言話者に対する質問紙調査の被験者数も46名と少なく、各世代における数も均等ではない。また、国会会議録での「売ってある」表現の出現数は、23例で決して多いとは言えず、議論の残るところであろう。しかし、小規模調査ではあるものの、先行研究で用いられた「気づかない方言」を定義するための3要素の全てを満たしているという事実は非常に意義深い。このことは、「売ってある」表現が「気づかない方言」であるという可能性を色濃く示している。今後さらなる調査を重ね検証していきたい。

5. 結論と今後の課題

本稿は、「[場所]=[対象]が売ってある」という表現を「売ってある」表現と呼び、これが長崎方言話者によって使用されているという事実を指摘し、その統語的・意味的特性と社会言語学的位置づけを考察した。

その結果、「売る」は配置動詞ではないものの、「売ってある」表現は、益岡(1987)によって分類されたA1型の「[対象]がVテアル」(Vは配置動詞が中心)と極めて類似した特性を有していることが明らかとなった。

また、国会会議録の調査により、「売ってある」表現が長崎方言話者のみならず、九州・近畿地方を中心に全国に広く見られることも認められた。さらに、「売ってある」表現が「気づかない方言」である可能性が高いことを示す事実を指摘した。

しかしながら、本稿には残された課題も多い。まず、国会会議録の調査では「売ってある」表現は23例と少なく、その分布を調べるのには十分とは言えない。また、国会会議録の調査における発言者の出身地による分類には限界があると言わざるを得ない。幼年期の居住地、親が話す方言の影響なども少なからずあると考えられる。また、長崎方言話者を対象とした質問紙調査においては、被験者数が少なく年代ごとの数が均等ではなかった。10代の被験者が多かったため全体のデータは若年層の特徴を色濃く示したのものとなったことは否めない。さらに、今回の質問紙調査は、共通語意識の有無を問う目的で実施したものでなかったため、「売ってある」表現の容認度が高いという事実は認められたものの、この事実のみで被験者が「売ってある」表現に共通語意識を持っていると断定するには十分ではない。

今後は、より広い範囲のより多くの被験者を対象にさらなる調査を行う必要があるだろう。また、「売ってある」表現が気づかない方言であるという本稿の提案する仮説を検証するために、質問紙調査、各地の県議会事録調査などを実施する必要もあろう。加えて、今回調査の対象としなかった「売っとる」「売りよる」「[対象]が売っている」という表現についても調査し、それらの使い分けについても考察していきたい。

さらに、井上(1998)、金水(2006a, 2006b)といった日本語の存在表現と存在型アスペクト形式に関する先行研究の成果を基礎として、それらの文脈の中での視野の広い考察が必要となる。これも将来の課題である。

謝辞

本稿の質問紙調査では、多くの方のご協力を賜った。特に、英語塾「サルヴァカレッジ・インターナショナル」のサルヴァドーライ・美奈子氏には調査の取りまとめおよび英語塾に通う生徒たちへの調査を実施していただいた。調査にご協力くださったすべての皆様に深く感

謝する。

参考文献

- 1) 井上史雄 (1983) 「ジュニア言語学 く気づかない方言」 『言語』 12-6.
- 2) 井上文子 (1998) 『日本語方言アスペクトの動態一存在型表現形式に焦点をあてて一』 東京：秋山書店.
- 3) 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 東京：くろしお出版.
- 4) 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」, 丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 東京：ひつじ書房. pp. 33-70.
- 5) 香月真弓 (2008) 「第9章 国会会議録における気づかない方言—「あっている」についての考察—」, 松田 (編) (2008) pp. 207-233.
- 6) 金水敏 (2006a) 『日本語存在表現の歴史』 東京：ひつじ書房.
- 7) 金水敏 (2006b) 「日本語アスペクトの歴史的研究」 『日本語文法』 6巻2号 pp. 33-44.
- 8) 国立国会図書館国会会議録検索システム
<<http://kokkai.ndl.go.jp/>>2011年2月5日アクセス.
- 9) 小林隆・篠崎晃一 (編) (2003) 『ガイドブック方言研究』 東京：ひつじ書房.
- 10) 柴田武 (1965) 『生きている方言』 東京：筑摩書房.
- 11) 鈴木行洋 (2005) 「「気づかない～」という術語について—新語研究の立場から—」 『日本語の研究』 第1巻4号.
- 12) 高間和広 (2007) 「長崎方言における「Xがあっている」構文に関する研究」 長崎総合科学大学人間環境学部環境文化学科 2006年度卒業論文 (未公刊).
- 13) 田川拓海 (2002) 「擬似自動詞の派生について—「イチゴが売っている」という表現—」 『筑波応用言語学研究』 9号 pp.15-28.
- 14) 田中宣廣 (2006) 「地域言語的用法の共通語視」, 鈴木良次 (編) (2006) 『言語科学の百科事典』 東京：丸善出版. pp.396-397.
- 15) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味：第II巻』 東京：くろしお出版.
- 16) 半沢康 (2003) 「第10章 現代の方言」, 小林・篠崎 (編) (2003) pp.201-225.
- 17) 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』 東京：くろしお出版.
- 18) 又平恵美子 (2001) 「「イチゴが売っている」という表現」 『筑波日本語研究』 6号 pp.93-102.
- 19) 松田謙次郎 (編) (2008) 『国会会議録を使った日本語研究』 東京：ひつじ書房.
- 20) 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』 東京：明治書院.
- 21) NHK 放送文化研究所
<http://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/qa/kotoba_qa_09080101.html#top>2011年3月10日アクセス.